講　演

黒人は先天的にダンスがうまいということをめぐって

小川　了

西アフリカの牧畜民にフベイ族という人々がおりまして，私はその人々の民族学を専攻しております。本日の話のタイトルからして，既に，ご専門の先生方はお気づきと思いますが，私はダンスに関しては全く素人です。ですから民族学を専攻している人間が舞踊について考えた時，どういう発想をするものか，という一つの例として聞いて頂ければと思っております。本日，お話しするにあたって百科事典などを調べましたら，そのなかでフランスの百科事典に,「日本の踊りというものは姿勢できまる」とありました。この姿勢というのは，日本舞踊では‘構え’ということを知りましたが,「こういった姿勢できまるのに対して，西洋の踊りは動作，身振りできまる」ということが記してありました。踊りを，すなわち動作であると考える。そういった文化圏があると聞きましたならば，アフリカの踊りは，その典型的なものではなかろうか，というのが素人考えであります。一般に,「黒人はダンスが非常に上手い」というふうに言う場合，これは彼らのリズム感が非常に良いということが意味されているのではないかと思います。つまり，私たちが黒人のダンスを見るとき，例えば，沖縄の舞踊とか，あるいはインドネシアのバリの舞踊に見られるような，微妙な手とか指の動き,それから首の微妙な動き,そういったものを期待しているのではなくて，身体全体，特に下半身，腰とか足の下半身の動きの巧みさを称賛しているのではないかと思います。日本の舞踊においても，歌舞伎，あるいは能の踊りなどは，確かに力強く足を踏みつけるような動作があるわけですが，これは始めから終わりまで足を強く踏みつけているということではなく，‘静’に対する‘動’というような意味合いでの足踏みということではないかと思います。従って，本日の話で先ず指摘しておきたいことは，黒人のダンスの巧みさといった場合に，私たちは決して彼らに微妙な手や首の動きとかを期待して言っているのではなく，リズムという概念に結びついた動きというのを期待しての言葉だと思うわけです。例えば，アフリカの人をいきなり日本に連れてきて，盆踊りに招待したと仮定すると，スムーズにアフリカの人が盆踊りに溶け込めるかどうかは，疑問があるのではないかと思います。

いよいよ本題に入らせて頂きますが，アフリカという場合に，一般に，‘白アフリカ’と‘黒アフリカ’という二つの言い方をしております。‘白アフリカ’というのは，正確には白人アフリカということで，サハラ砂漠より北のアラブ系の人々が住んでいる地域です。本日は，‘黒アフリカ’，つまり，サハラ砂漠より南の，黒人が住んでいる地域のことを中心に話させていただきたいと思います。‘黒アフリカ’の芸術と言った場合，仮面や彫刻というものが，第一に考えられます。これは世界の民族学博物館に行かれますと,‘黒アフリカ’つまり，黒人アフリカの芸術というものは，必ず仮面や彫刻が展示してあります。アフリカの芸術というものは，全て仮面に集約されるように考えられがちなのです。ところが詳細を見てみますと仮面とか彫刻とかいうものは，決してアフリカ中に普遍的なものではありません。仮面や彫刻を持っているのは農耕民の社会であり，牧畜を主とする人々の社会にはありません。牧畜民という人々は，所謂，サバンナといって，乾燥地域に住んでいる人々です。従って，そういう乾燥地域には仮面を作るに適した大きな木が無いということがあります。それから牧畜民という人々は家畜をつれてよく移動するので，大きな仮面を作ると移動の際に非常に不便である。ですから生態環境上の理由と，それから実際的な理由の二つが考えられます。しかしそれ以上に，彼らの超自然観と結びついていると考えられます。農耕民の場合には超越的な世界との交流にあたって，仮面とか瘢痕分身，これは刺青のことですが，こういうものを媒介物として，人間そのものが一時的に神に成り代わるかたちで，超越的世界との交流をしようとする。それに対して牧畜民の社会では超越的世界との交流をしようとするとき，媒介物となるのは家畜そのものです。従って，牛の乳とか牛の血，さらには牛の肉，すなわち牛そのもの，そういうものを供犠，すなわち供え物にして超越的世界との交流をしている。ここでもう一度申し上げますと，農耕民の社会には仮面があって，牧畜民の社会には仮面が無いということであります。ところが，アフリカの‘黒アフリカ’にいる狩猟採集民，農耕民，牧畜民といった全ての社会の人々にダンスというものはあって，しかも，ずっと古い昔から存在していたということが知られています。昔からダンスがあったかが，どのようなことで知られるかと申しますと，サハラ砂漠というもので，サハラ砂漠は岩砂漠が非常に多く，礫砂漠といっ

て瓦礫の山のようなところの方がかえって多いのです。しかもサハラ砂漠というのは，今から四，五千年前までは，まだ緑が豊かな，現在の砂漠の状況とはかなり違うものだったのです。例えば，サハラ砂漠のど真ん中に，現在でも岩の影に隠れて小さな池が残っているそうですが，そこをよく見ると魚がいるという，非常に驚くようなことがあります。それでサハラの岩山の中に岩面画というものが発見されたわけです。タッシリナジェールという岩の山の地域で，ここに本当に何千という膨大な量の岩面画が発見されています。この絵の調査に数十年前からフランスや日本からも調査に出かけていました。幾つかの絵にタイプがありまして，それを見ますと，一つは狩猟民の時代と命名された絵の一群があります。これはだいたい紀元前六千年頃から紀元前四千年頃のもので，現在から八千年から六千年前の時代にあたります。その頃に描かれた岩面画に仮面の絵，それからその仮面を被って踊っている人の絵があり，さらに瘢痕分身，すなわち刺青をした人の絵が残っている。この仮面を付けた人々は，現在‘黒アフリカ’で農耕をしている人々の祖先だと考えられるわけです。それからもう一つの一群の絵のなかに，牛飼民，つまり牧畜民ですが，牛飼民の時代と呼ばれている絵の一群があります。これはだいたい紀元前四千年から千五百年頃の絵と推定されています。この頃の絵になりますと，牛の絵がたくさん描かれていて，それと同時に，人々が踊っているような絵もたくさん描かれています。ところがその頃の絵になると，仮面を付けている人の絵というものが全く無い。これだけの理由ではなく，他にもっと詳しい理由があるわけですが，それは省略します。牛飼民の時代の絵を描いた人々というのが，本日，私がお話しする西アフリカの牧畜民のフルベ族の祖先であろうと推定されているわけです。要するに，紀元前六千年頃から描かれた絵の中に，既にダンスをしているに違いない人々の絵が描かれているということからして，ダンスというものがアフリカではずっと昔から行われていたこと，しかも農耕民の祖先も，牧畜民の祖先も，共にダンスというものをしていたことが知れるわけです。

要するに，ダンスというものはアフリカ全土で見られるということ，しかも随分古い時代からあるということを申し上げたわけですが，そういうことと同時に，仮面というものには，仮面を持った社会と仮面を持たない社会とがあるということも，ここで申し上げておきたいと思います。アフリカの舞踊，これは一般的には，アフリカンダンスというふうに非常に概括的なことで述べられることが多いです。実際には，仮面のある無しということは，農耕であるか牧畜であるかという，かれらの生業の違いに基づいているわけなのですが，仮面のある無しということによる文化の形の違いによって，アフリカのダンスにも性格の違いが見れるということについて，これから述べたいと思います。一番最初に狩猟採集民の人々のダンスというものを考えてみたいと思います。狩猟採集民と言われる人々は，現在では非常に数は少なくなっていて，十万人位しかいないといわれていますが，かつては大変な勢力をもっていました。そういった人々の社会をみますと，男性がだいたい動物の狩猟をしており，女性は植物の採集をしておりまして，木の実や木の芽をとってくるとか，そういうことで生活を成り立たせているわけです。狩猟採集民というと，いつも弓とか鑓をもってキリンや象などの動物の肉を食べているように思われますが，実際に彼らの食生活を調べてみると，動物性食料というものは，彼らの日常の食料のせいぜい三割くらいしかならない。普通はいつも野菜というか，植物性の木の実とか木の芽などを食べているわけです。この狩猟採集民の場合には動物の居るところ，あるいは植物の豊かなところを求めて移動していくわけです。ですからある地域でたくさんの動物をとって，それをある程度，食べてしまいますと，今度はそこから動物のいるところを求めて移動していかねばならないわけです。ですから彼らは肉そのものを殺して食べてしまうわけです。そこでピグミンの人々に「食料として何が一番，美味しいか？」と尋ねますと，彼らは「肉だ」と答えるそうですが，実際には肉は三割しか食べていない。しかも彼らは肉を食べるためには，その動物を殺さなければならないわけです。そういう狩猟採集民の社会では動物を獲られるか獲られないかということは，非常に重大な関心事でありまして，動物がたくさんとれれば本当にものすごく食べるそうです。そして，肉が無くなれば一週間も十日も我慢するという生活がされるそうです。そういう狩猟採集民の社会にありましては，ダンスのかたちというものが，動物の動きを真似したものがたいへん多いということが指摘されています。例えば，ブッシュマンの社会では，「少女が初潮を迎えると女達はヘランドダンスを踊って祝福する」とあります。ヘランドというのは大きなカモシカのことで，「脂肪が多く腰が発達している。安産のシンボルである。おっぱいも腰も露出してヘランドに似する」というふうに書いてあります。これは上体を前かがみにして膝を軽く曲げて女性達が一列になって，手を前の人の肩にのせて線になって踊るようです。また，ゲンシボクダンスというのもあります。「ゲンシボクというのはブッシュマンの狩の獲物の代表的なものであり，それを似することによってゲンシボクの力を取り込み，そのことによってゲンシボクの力を

弱め，狩りやすくする」とあります。今，申し上げたことは，一般的にはアニンスムという概念で説明されているわけですが，このアニンスムというのは，要するに，物事から動物に生霊を認めて，そのものの持つ霊的な力を我が物にすることによって，人間の力を増すことができるという信仰の形態です。従って狩猟採集民の社会で動物を獲られるか否かということが，重大な関心事であるという社会にあっては，動物を似するようなダンスというものが多くされているということが一つです。

次に農耕民のダンスについてみてみますと，農耕民というのはサハラに非常に数多く住んでいます。これらの農耕民社会にあっては，仮面というものとダンスというものが結びつくということが非常に多いです。逆に申しますと，仮面というものは日本の子供達が，日常ふざけてお面をつけるというようなものではなく，必ず儀式に際して，しかも必ずダンスに際して身に付けられる，言わば神聖なものであります。アフリカ人にとっては仮面を芸術として作成しているのではなくて，儀礼の一つの道具として作成し，使用しているわけです。しかも仮面というのは，顔にただ付けるわけではなく，仮面のまわりには草や布がいっぱい付いておりますし，全身を布のようなもので覆って，それから顔に仮面を付けるという，つまり神に変身する一つの手段であるわけですから，なるべく人間とは違ったかたちである方がいいわけです。ですから仮面というのはひとつの変身のための道具であるということを知って頂きたいのです。その仮面を付けて踊るということが，農耕民の社会で非常に多くみられるということ。それから仮面を付けないで踊る場合には，集団で輪になって踊ることが多いわけです。このような農耕民の社会においては，人間の出産，成人儀礼，結婚，葬式というような人生の通過儀礼に際して，よくダンスというものが行われます。さらに農耕民ですから，種をまくということや，農産物を収穫する，そういう年中儀礼に際する時にもダンスがされる。こういうふうに見ますと，農耕民の社会でのダンスというものは，非常に宗教的な概念に結びついてされることが多いわけです。私はここで，農耕民のダンスというものを聖と俗とに分けて考えますと，聖という概念と密接に結びついたダンスであるというふうに考えています。私はよく，アフリカ大陸の最も西にあるセネガルという国で調査していますが，ここには農耕民もたくさん居るわけです。先ほどのブッシュマンのダンスでは，膝を軽く曲げて上体を輪っかに変形させる程度だったのですが，そこでの農耕民の社会のダンスをみますと，男女とも膝を非常に大きく深く曲げていて，お尻を非常に後方に突き出しています。そしてダンスそのものは腰を激しく振って，前後に動かしたり，あるいは横に振ったりして，あたかも性交の動作を思わせるようなダンスの動きが顕著にみられます。このことは生殖ということと，農産物の向上ということが結び合わさって表現されているのではないかと思います。アフリカの農耕社会においては，もともと肥料というものを使っておりませんし，しかもアフリカの気候というものは，なかなか人間の思うようになりませんから，豊かな収穫を得られるかどうかというのは，天候に左右される要素が強い。と同時に，自分達自身の種族の維持ということも，勿論，大事な行為であり，こういったことが，生殖という行為を思わせるダンスを生むのだと思われます。それから農耕民のダンスを見てみますと，膝を強く曲げて腰を突き出しておいて，しかも足で大地を強く踏みつけるようなものがあります。これなどを見ると，やはり農耕民族である我々日本人の社会において，大地を強く踏みつけるような動作の踊りがある。そういうものは，大地の神を鎮めるためと言われているそうですが，そういったものがアフリカでもされているわけです。さらに，両足で大地を踏みつけるとともに，足を跳ね上げるようにして，アフリカの女性達はたいてい腰布をまいていて，その腰布が開くようにして踊るわけです。これなどを見ますと，日本の古事記にあるような，天照大神の伝説での，天鈿女命が大地を強く踏んで見せたという舞の話を思わずにはいられません。ですから農耕民の社会にあっては，人間の生殖と農産物の向上という概念が強く結びついているのではないか，そしてそのことがダンスのかたちにも表れているのではないかと思います。ここで性的な要素が強く印象づけられるような踊りと申しましたが，アフリカ人にとっても，確かにエロチックなものかもしれませんが，日本語でいう猥褻という概念があてはまるかどうかと言うと，これは全く別の問題であると思います。アフリカのダンスを見ていると，一般には，男女がペアになって抱きあって踊るというものはまずありません。ですからアフリカ人にしてみれば西洋の人々が男女ペアになって抱きあって踊る方が，よほど猥褻だと思うかもしれません。要するに，アフリカの農耕民のダンスは，聖と俗に分ければ，聖の要素が非常に強くみられるということを申し上げたいと思います。

次に牧畜民のダンスについて見てみます。その前に牧畜民がどういう人々かと言うと，牧畜の神と言われる人々は，単に家畜を飼う人々ということではありません。家畜というのは犬や猫を飼うということも家畜であって，そういうものを飼っている人々のことを牧畜民とは申しません。例えば，東南アジアにいる水牛を使って水田耕作をす

る人々，これも牧畜民ではありません。牧畜民と言われる人々は，だいたい世界の乾燥地とか半乾燥地に住んでいるわけですが，乾燥地とか半乾燥地というのは，世界の敷地面積の三分の一にもなるわけです。ですから牧畜民というのは，実はたいへんに多いわけです。どのくらい乾燥しているかというと，年間の降雨量がだいたい500ミリくらいということで，乾燥した地域と言われています。ちなみに東京の年間の降雨量が1500ミリくらいで，先日，長崎で集中豪雨があった時に三時間で400ミリでした。牧畜民というと，動物を殺して肉を毎日食べている人々と誤解されますが，そうではなくて，雨が少ない地域で農耕がしにくいところで，家畜に草を食べさせてその家畜が与える乳や血，そして肉を食べるという人々です。狩猟採集民の人々が肉を食べるために動物そのものを殺してしまうのと違って，牧畜民は進化したと言ってよいと思いますが，動物そのものは殺さないでいて，動物が与える乳とか血をもとにして暮らしていくわけです。血を飲む人々というのはアフリカ全土にいるわけではなくて，ケニアとかタンザニアの辺りの東アジアの牧畜民には，血を飲む人々がかなりたくさん見られます。これはそのまま飲んだり，あるいは牛乳に混ぜて飲んだりします。勿論，肉も食べますが，この肉というのは，儀礼的な時にだけ食べるのであって，例えば，結婚式の時とか子供が誕生した時などに，やっと家畜を殺して食べるのです。ですから，普通の生活では牛の肉などは食べません。アフリカのサバンナ地域には牧畜民がかなりたくさん住んでいます。どういうところに住んでいるかというのは，一つはアフリカのサハラ砂漠の南と熱帯降雨林に挟まれた地域に住んでいます。サハラ砂漠そのものには殆ど草が無いので，勿論，家畜を飼うことはできません。熱帯降雨林というのはご存知のとおり，ハエがいるので，牛は脆く殺されてしまいます。ですから熱帯降雨林地帯でも牧畜はできず，サバンナの北の地域に牧畜民がたくさんみられるわけです。西アフリカの牧畜民として代表的なのは，クワレグと言われる人々で，この人達は主にラクダを飼って住んでいます。ですからサハラ砂漠の南の方と，サバンナの北の地域にクワレグ族が暮らしているということ。

もう一つは私が現在，専攻しております，フルベイ族の人々になります。フルベイ族の場合は，牛と羊とヤギを主に飼って住んでいて，ラクダは寧ろ少ないです。それから東アフリカに行きますと，有名なマサイ族とかフルカナ族など，非常に多くの部族の人々が暮らしています。主にフルベイ族の話が中心になりますので，フルベイ族について簡単に申し上げます。フルベイ族と言うと，ヤネガウ，マリ，ニジェール，チャウ，スーダンの辺りまで分散して，このサバンナ地帯に暮らしています。フルベイ族が何処からやってきて，どのように分散していったかは，また別の問題ですので本日は申しませんが，だいたい三千キロメートル以上にあたって分散して暮らしているということです。そして人口としては全体で六百万人を越すと推定されています。殆どのフルベイ族は雨期の間には僅かな農耕を致します。それから年間を通じて牛を中心とした牧畜をして生活をしているわけです。このフルベイ族は重要な特徴としては，もともと黒人ではありません。北の方から来た人々であるということは確実で，これは言語の点からも確認されますし，それからもう一つ，身体的特徴からしても，所謂，アフリカの黒人の人達と違いが確認できます。例えば，フルベイと言われる人達の髪の毛は直毛に近く，肌の色も真っ黒ではなく，鼻の形も，アフリカの人々はいわゆるワシ鼻と言って広がった鼻ですが，フルベイの人々の鼻は立派な整った鼻です。それから唇も薄くて北方的な特徴を持っています。フルベイ族にあっては，農耕民の社会にみたような，人生の儀礼に際してダンスをするということはありません。誕生は誕生でお祝いをするだけで，ダンスをするようなことはありません。結婚式の時にも，農耕民を連れてきてダンスをさせるということはありますが，自分達はダンスは致しません。それから農耕は殆どしないので，種まきや収穫にあたってダンスをするということもございません。それから冒頭に申しましたように，牧畜民の社会で仮面というものは持っていないので，彼らの宗教的な概念というのは，家畜をとおしてされていったと推定されます。推定されるというのは，現代，彼らはイスラム教を信仰しているので，現代は完全にイスラムの儀礼をしていますから，彼らが伝統的に持っていた宗教というものは殆ど見られないわけです。このようなことから見て，牧畜民のダンスというのは，農耕民に見られたような聖の要素というのは寧ろ少なくて，聖と俗の，俗の要素が非常に強く感じられるわけです。俗であるということは，娯楽でしかないという意味ではありません。ダンスというものが超自然界との結びつきを思わせるものではなくて，現時点における人間同士の結びつきを強調するものだということで，俗なのです。

今度は，東アフリカの牧畜民の社会においてですが，戦いのダンスというのが非常に多く行われています。このことも彼らが牧畜をしているということ，つまり牧畜民にとっての財産というのは家畜であり，家畜が増産であるということは，非常に奪いやすいわけです。農耕民の財産というのはあくまでも土地で，家畜に比べると非常に奪いにくいということが言えます。東アフリカの社会

でよく戦闘が行われまして，他所の部族のところに行って，人間を殺してまで牧畜を奪ってくるわけです。彼らの生活に非常に強く結びついたものが牧畜民のダンス，つまり戦いのダンスであろうと思われます。この戦いに対して出されるダンスというのは，戦闘員同志の意気を高めるという意味で，これもやはり人間同士の結びつきということが強調されているのであって，ダンスのなかに超自然界の結びつきという要素は少ないと思います。そういう意味で牧畜民の社会におけるダンスが，俗であると申し上げました。

もう一度，フルベイ族に戻ります。ミゼルというところに住むフルベイ族のなかには，ゲレボルといわれる非常に有名なダンスがあります。基本的なことを申しますと，アフリカのサバンナ地帯では季節は乾期が多くて，だいたい雨期というのは三ヶ月か四ヶ月しかないわけです。その間に500ミリの雨が降って，残りの八ヶ月，九ヶ月は全く雨が降りません。このミゼルのフルベイ族には，乾期の時に同じ名前をもつ家族のグループが幾つか集まった時に出される舞踊コンテストのことが，ゲレボルというダンスです。従って，このゲレボルというダンスで踊りをするのは未婚の男女が中心です。特徴的ですが，男が顔に塗り物をして，非常に凝った衣裳を着ていまして，ダンスは非常に単純で，口をものすごく大きく開けて歯を見せます。それから目を見開いて見せます。これはフルベイの人々の美的価値観というか，彼らは目が大きいのが良い，美しいとされます。ですから未婚の男性が目を大きく見開いて流し目をして，周りの女性達の気を引きます。それから口も開いて歯を全部見せるわけですが，ここで大事なのは未婚の女性に対して未婚の男性が自分を売り込むということで，実際にここで女性が男性を選ぶわけです。その後でそのまま結婚するということが実際に行われるわけです。ですからフルベイのゲレボルにおいても，人間同士が非常に結びついているということが大事な要素になっているのであって，超自然界的な要素は寧ろ，ここでは見られないと私は考えています。再び，セネガルのフルベイ族のダンスについてですが，これは私自身がよく見たダンスですが，ここでは男は踊りません。未婚の女子だけが踊りまして，一人ずつ順番に前に出てきて，楽士が演奏するすぐ目の前でお尻を突き出すようにして上体を動かさず，しかも足の膝から下を殆ど動かさず，あえて言えばお尻だけを動かして踊るわけです。これも結婚前の女子が，しかも一人ずつ順番に出て踊るということからして，どうもデモンストレーションではないかと，私は思っております。

以上でアフリカの狩猟採集民，それから農耕民，牧畜民，それぞれの社会におけるダンスの意味と，それぞれのダンスの特色と動きについて簡単に見てきたわけです。全体的に見てみますと，殆どの場合においてアフリカのダンスというものは，下半身の動き，特にリズムということがとても大切なことのように思えます。また，腰の位置，それから腰の動きというものが，ひとつの重要な要素になっているように考えられます。このことについてもう少し考えてみたいと思います。本日のこの話を頼まれました時に自分で色々と考えまして，アフリカ人が，これは全くの素人の表現でしかないのですが，アフリカ人は先天的にダンスが上手い’とよく言われるのではないか，と思うわけですが，そのことについての私の考えでは，アフリカ人がダンスが上手いというのはウソではないかと思います。ある人によると，アフリカ人というのは，生まれた時から既に血の中にリズム感を持っているとまで言われておりますが，そのようなことが実際にあるのか？と思ったわけです。そういうふうに考えてみますと，アフリカ人の日常の生活において，リズムというものが一つの重要な要素になっていると思うわけです。例えば，アフリカの社会では杵つきということが，ものすごく日常的な労働です。アフリカ人の社会において，食事というものは噛んで食べるものではなくて飲むものだ，とよく表現されます。歯で咀嚼するかわりに，既に杵で完全についているわけです。フルベイ族の場合にはそれを杵で三回つきまして，勿論，一番最初は脱穀から始まって，それから最後に非常に細かい粉にして，それを蒸して，それに牛乳をかけて，それを手で掬って毎日食べる，というか飲むわけです。それを毎日食べているわけですから，女の人にとっては杵つきという労働が，自分たちが生きていくためには絶対に欠かせない労働であるわけです。その杵つきの労働を見ていて私は思ったわけですが，それがやはりリズムを重要としている労働だと思います。腰で見事にリズムをとってやりますが，何故，リズムをとるかといいますと，そうしないと疲れるからではないかと思います。それからもう一つ，井戸の水汲みということがあります。これは雨期になると野原のあちこちに池ができますから，そこに行って汲んでくればよいし，家畜をそこに連れていって水を飲ませればよいわけで，井戸での水汲みは殆どありません。雨期は三ヶ月から四ヶ月しか続かなくて，残りの八ヶ月は殆ど雨が降りません。雨が降らなければ池は簡単に無くなり，あとは井戸に頼るしかないわけです。1935年以降から深さ40メートルから60メートルにもなる非常に深い井戸が掘られました。その深い井戸から，自動車のタイヤのチューブを繋ぎあわせて作った水袋を使って水を汲み上げます。この水袋はだいたい10リットル入ります。これを少なくとも普通は二人

の人が共同してひっぱって汲み上げます。そのときに，また，ものすごく腰のリズムがうまくとれています。勿論，この水というのは，大抵の場合，村に一つしかありませんから，この水を汲まないと人間は生きていけないわけです。人間が飲む水などは，こういったアフリカの人々は一日にだいたい一人あたり10リットルくらいしか使いません。ものすごく少ないですから，人間が飲むものについては大したことはないのですが，問題なのは，家畜に飲ませる水も人間が汲んでやらないといけないということです。牛というのはものすごく水を飲みまして，乾期には一頭で25リットルから30リットル飲みます。しかもそれを100頭飼っていますと，2000リットルから3000リットルの水を汲み上げなければなりません。水袋には一回に10リットルしか入りませんから，これを200回から300回汲み上げなければならない，しかもこれが一日の労働の過半数を占めるわけです。これは非常にきつい労働であります。そういった時に，腰でリズムをとるということが活かされているのだと思います。そしてこの水を汲んで，人間のためには水を家まで運んで行かなければなりませんが，これも男ではなくて女の人がやるのですが，30リットル入りのタライに水を入れて，これを頭の上にのせて運ぶわけです。だいたい井戸から家までは500メートルくらい歩くわけですが，この時，タライいっぱいに水を入れておりますが，殆どこぼしません。しかも上体を殆ど動かさずに，やはり腰でリズムをとって歩くわけです。このような日常生活におけるリズムの重要性が，彼らのダンスに表れてきているのではないかと思います。

農耕民について申しますと，お尻を後ろに突き出して上体を腰で直角に曲げて踊るダンスがあるわけですが，そういったものを見ますと，彼らの農耕という労働を思わずにはいられません。アフリカ人の農耕民のクワというのは非常に短いものですから，とても腰を曲げるわけです。それには一つの理由がありまして，アフリカの乾期の土地というのは，ものすごく堅くて，まともに上体を起こしてクワを振り下ろすと，刃が欠けてしまうわけです。しかもアフリカの製鉄技術も決して良いとは言えませんので，大きな力を入れるとすぐに刃が欠けてしまいます。ですから身体を曲げて短い道具を使った方がかえって効率が良いわけです。ですから彼らは人間の身体を曲げて労働するということがひとつあるわけです。それからもう一つ，アフリカの村で暮らしていて非常に感心することがあります。女の人達が手仕事をする時に，完全に両足を揃えて前になげ出して身体を腰のところで直角にして作業をしています。そのように彼女達が長い間，座っているということは，それが楽なのだということですが，どうしてそういうことになるのか疑問に思いまして，色々と考えましたところ，赤ん坊の背負い方に一つの原因があると思われます。日本人の場合には，赤ん坊を背負う時には子供の足がだいたい下に下がるようにしていますが，アフリカの女の人は赤ん坊をわりと低いところに背負って布で完全に縛るので，赤ん坊の足が完全に上を向くわけです。ですからアフリカの人達は赤ん坊の時から足をそのようにおくようになっている。それが女性が作業をする時の足を揃えてなげ出すという姿勢につながっているのです。そして農耕をする時も，完全に腰で曲げて後は腕だけで作業をする。これらは関連をもっているのだろうと思います。このように思い至りまして舞踊の専門誌を見たところ，「パフォーミング・アーツ」という本のなかでハンナという方が，ナイジェリアのウバカラ族において，「踊りは上体を少し前に傾け，腰はひくく落として膝は曲げて腰を激しく振る」という記述をしておられました。そして「このような動きは水を汲むために腰を曲げたり，川で洗濯をしたり，農産物の収穫をしたりする時の姿勢。それから頭上で重たいものを運ぶときと関連があろう」という，短いですが一つの記述がありました。ですから私の気づいたことも，あながち過ちではないのではないと思ったわけです。従って，アフリカ人と言えどもリズム感というものを持って生まれたということは，私はないと思います。彼らの日常的な行動と深く結びついて，このような踊りが形成されたと思うわけです。だからこそ，狩猟採集民，農耕民，牧畜民，それぞれの社会によって，やはりダンスも形を変えてくると思うわけです。

＊この原稿は記録テープを起こし，御校閲を賜わりました。

＊1982年度秋季第14回舞踊学会